

あなたはどのような友人と付き合っているか

— 友人選択における原子価の影響について —

船 越 弘 子*

Which kind of friends do you have?:
The effect of valency on the choice of friends

Hiroko FUNAKOSHI

要 旨

人が多くの人の中から友人を選択する際、現在までの先行研究から自分との「類似性」や「異質性」に影響されていることが明らかになっている。そこで、本研究の目的は人間の特性についてBion (1961)、Hafsi (1997) の理論である「原子価 (Valency)」の観点から述べ、「類似性」と「異質性」による対人選択について新たな観点を提供することである。そのため、最初に「原子価」の特徴と分類についての概念について詳しく述べた上で、Hafsi (2006) の原子価同士の繋がりに関しての仮説について述べた。その上で、Hafsiの仮説に基づいた新たな仮説を立て、それを実証する研究をおこなった。その結果、人が対人選択に用いるのは自分との「類似性」が最も影響があることが明らかになり、さらに「異質性」も影響があることが証明された。換言すれば、本研究から対人関係は最も「類似性」関係が構築されやすいが、「異質性」即ち「相補性」関係も構築されることも新たな観点から示唆された。

I. 目 的

世界中の至る所で友人関係に関して、日本語では「類は友を呼ぶ」、英語では「Birds of a feather flock together」などの共通的な諺が存在する。この言葉が象徴するように、人が多くの人の中から友人を選択する場合、自分と友人になる相手には何らの共通点があると考えられてきた。この対人選択については、現在までに、心理学、社会学、文化人類学などの多くの分野から研究が進められてきている。特に社会心理学の分野では、1920年頃から集団研究を基とした対人関係についての研究が進められてきた。Mereno (1934) はソシオメトリーという方法で対人関係を構造化し、その後、対人選択の研究は対人魅力研究、対人関係の親密化過程研究へと発展していったと述べている。「親密化過程」研究は、大きく分けて、2者関係に共通点が多く存在するために親密化する「類似性」論、自分にはないものをお互いに補充し合うために親密化す

平成17年9月30日受理 *社会学研究科研究生

る「相補性」論の2つの方向から行われた。現在までにこれを基にし、多様な行動や状況に関して「親密化過程」研究が進められている。また、自分と他者が何らかの共通がある事を示す「類似性」、また、反対に何らかの違いがあることを示す「異質性」について、何が「類似」及び「異質」としているのかという事に関しての研究も多くの観点から進められてきている。そこで、本研究では、精神分析における「対象関係論」のBion (1961)、Hafsi (1997) 理論の「原子価 (Valency)」という観点から「類似性」と「異質性」について述べ、それに基づく実証的研究を行った上で、対人選択について新たな示唆を提供することを目的としている。

Ⅱ. 基本的な理論

1. 原子価の概念

最初に精神分析の立場から、人と人、人とグループが繋がり、即ち、linkについて述べたのは、Freud (1921) である。Freudはメンバー同士とグループ全体と各メンバーはリビドーによって結ばれていると定義した。それについてBion (1961) はlinkについて物理学の用語である「原子価」という言葉を引用し説明している。Bionは原子価とは、個人がグループにみられる幻想的活動に積極的に参加したり、寄与したりすることができるための不可欠な個人的特性であると定義している。更にHafsi (1992) は上述した原子価について発展させ、原子価とは一定の安定した形で対象 (人、グループ等) と繋がるために個人的な素質や特性であると定義している。つまり、原子価とは個人が示すメンバーやグループとの相互作用的な接触パターン、グループ状況に対する反応、行動や貢献パターンを示しているといえる。

また、Bion (1961) は原子価のタイプについて依存、闘争・逃避、つがいの3つ種類があると述べている。しかしながら、Bionはその原子価の3つの分類について詳しく定義してはいない。そこで、Hafsi (2003) はBionの原子価のタイプについて自らの経験を踏まえながら、原子価の具体的な特徴について定義した。その際、Bionは闘争・逃避の原子価は同一であると分類していたが、Hafsiは両者には類似性もあるが、これらのタイプには重要な相違点もあるという事実を基にして、闘争と逃避を分類した。即ち、原子価のタイプは依存、闘争、つがい、逃避の4つに分類したのである。以下に示すのは、各原子価の主な特徴である。

依存 (Dependency) : 本人は自己評価が低いため、他者を理想化し、他者に強く依存する傾向がある。そのため、他者の存在が不可欠である。また、他者に愛されることに強い欲求があるため、自分の意見を他者の意見に合わせようとする順応主義傾向や他者による評価を重視する傾向がある。しかし、他者に対して高い共感能力を持っており、他者の役に立ちたいなどの願望を持つなどの愛他主義的であり、他者からの依存を受け入れやすい傾向がある。

闘争 (Fight) : 常に「敵」を意識する強い競争心、攻撃性を持っており、他者に対する不信感を持っている。さらに自分に高い自己評価を持っており、人の上に立ちたいという強い願望を持っている。そのため、他者と関係やグループ活動下において、活発性、積極性、判断力を発揮し、自分を表現することにより他者と繋がろうとする。しかし、自分や他者の弱さや敗北を認めず、自己中心的に物事を考える。また、感情に左右されず、他者への共感性は低い上に現実を重視す

る傾向がある。

つがい (Pairing)：本人は、他者に対して一見、外向的であり、陽気であるが、実際は常に孤独感を持ち合わせている。そのため、他者との個人的な「親密的」な付き合いを好む傾向にある。また、異性に対して積極的に振舞う反面、自分の友達や恋人に対して嫉妬深い傾向にある。グループ活動においても、平等主義などに象徴されるように横的なつながりを重視し、「同類」の友情を好む傾向にある。また、未来志向の楽主義者が多い傾向にある。

逃避 (Flight)：自分に自己愛的な高い自己評価を持つ上に、他者に対する不信感が強く、他者との競争や葛藤を回避するために、人と一定の距離感を保とうとする。そのため、他者関係やグループ活動下では消極的で内向的である。また、自分が他者や規則、時間、責任の伴う地位などに縛られる事を嫌う傾向がある。しかしながら、他者や環境に対して優れた観察力を持っている。

このように各原子価には独自の特徴があるが、個人には特定の原子価だけが備わっているのではなく、水準が異なった全ての原子価が備わっている。しかしながら、個人が最も自分に適応し、同一化できる原子価は1つだけである（以下 個人の原子価）。つまり、この原子価は人が他者やグループとの関係において、相互作用的に繋がりを持つ場合に一番頻繁に示されるものであり、個人はこの優勢な原子価に沿った行動を行うのである。

2. 原子価の応用

上述したように、個人は自分の支配的な原子価の特徴によって行動し、個人やグループとの関係を構築していくのである。Hafsi (2005) は支配的な原子価が人の物理的・社会的環境に関する考え方、人との接触のあり方や、グループ生活や活動の様々な側面の好き嫌いにも反映されるとしている。それについての実証的な研究として、支配的な原子価が、友達、恋人、リーダーシップスタイルの選択 (Hafsi & Yamagata, 1996)、グループにおける役割を決定する (Hafsi, 1998) などの研究を挙げている。このように、個人の支配的な原子価は個人の他者との繋がりにおいて、重要なものであるといえる。Hafsi (2006) は上述した研究を基に、原子価同士の繋がりについて以下のような仮説を述べている。

Table 1 人間の化学に関する図表的仮説

Valency	DV	FV	PV	FIV	
DV	○	●	○	○	●=永続する補助関係
FV	●	○	○	×	○=一時的な関係
PV	○	○	○	×	×=相互的な回避関係
FIV	○	×	×	●	

Source: Hafsi, 2006

Table 1 に示されているように、依存の原子価の人（以下 依存の人）は、特に自分を尊重してくれる関係や自分の依存を促進してくれる関係などの相互的な傾向の結果として、同じ原子価の人と一時的な関係を持つ。更に、依存の人は自己評価が低いことや自己主張の欠けている結果を補足するために闘争の原子価の人を好み、永続する相補的關係を構築する。闘争の原子価の人

(以下 闘争の人)の特徴は、同じ原子価の人とはお互いに影響を持たずに存在し、一時的な関係を持つ。しかし、依存の人とは相互に補足する傾向にあるため永久的な関係を構築する。また、つがいの人(以下 つがいの人)とは一時的な関係がみられる。しかし、闘争と逃避の原子価の人(以下 逃避の人)は同じ攻撃性が異なった表現方法であるために、相互的な嫌悪や回避の傾向を持つ関係にある。つがいの方は、特に関係を持つのに友愛と親密さを必要し、依存、闘争、つがいの人と一時的な関係を持つ。しかし、逃避の人とは相互に避ける傾向にある。逃避の人の特徴は、闘争、つがいの原子価の人の両者ともに避けるが、依存の人とは一時的な関係を持つことができる傾向にある。また、同じ逃避の人とは適切な対人関係の距離を保つことが出来るために、永続的な関係を構築することが出来るのである。

Ⅲ. 実証的研究

1. 仮説

本研究では、上述したHafsi (2006)の原子価同士の仮説を応用し、個人が友人選択を行う際、各個人の原子価とその2者関係がどのような関係性が示されるのかという実証的研究を行った。本研究の仮説は以下の通りである。

仮説Ⅰ：依存の方は、どの原子価の人とも友人として選択するが、特に、闘争の人や同じ依存の方を友人として選択するであろう。

仮説Ⅱ：闘争の方は、依存の人や同じ闘争の方を友人として選択するが逃避の方は友人として選択しないであろう。

仮説Ⅲ：つがいは、依存、闘争、つがいは友人として選択するが、逃避の方を友人として選択しないであろう。

仮説Ⅳ：逃避の方は、同じ逃避の方と依存の方を友人として選択するが、闘争の人やつがいの方を友人として選択しないであろう。

これらの仮説を実証するため、下記の質問紙調査を実地した。

2. 方法

2-1. 期間と被験者

上述した仮説を検証するため2005年4月11日～7月31日の期間中に質問紙調査を実地した。質問調査は対象者である奈良大学の学生、102名(男67名、女35名)とその友人(男62名、女40名)合計204名に対して行った。手続きとして、最初に被験者である奈良大学の学生に対して質問紙調査を行った。その後、被験者に「今、あなたが行った方法で、あなたが最も親しくしている友人か、もしくは、恋人にこの質問紙を受けてほしい。」と条件を付け、友人に対しての質問紙調査を依頼し、その後質問紙を回収した。その際、どの被験者の友人であるか、友人の性別の2点について必ず記入してもらった。

2-2. 尺度

個人の原子価を測定するためにReaction to Group Situation Test～奈良大学版～(RGST-Nu)(Hafsi, 2005)を行った。この質問紙はBionの理論に基づいて、Stock&Thelen(1958)が開発した文章完成式のテストを、Hafsi(1997)が改正したものを再度、Hafsi(2005)が改正したものである。この質問紙は、グループ状況下での個人がグループや他者に見せる反応やつながりの方
法によって、各個人の最も優勢な原子価(依存、闘争、つがい、逃避)を測定することができる。

質問紙の事項の内容は依存が7項目、闘争が6項目、つがいが5項目、逃避が6項目、Workが5項目の計29項目から構成されており、ランダムに書かれている。

質問紙の実地の際、質問者は各刺激状況(質問項目)を20秒の間隔で読み、被質問者はできるだけ早く、かつ深く考えないで自由連想法を用いて空欄を埋めるように指示された。又、その際、他の人と相談しないように指示を出されていた。このテストの所要時間は約20分であった。

3. 結果

3-1. Reaction to Group Situation Test～奈良大学版～(RGST-Nu)の採点

Hafsi(1997)は優勢な原子価の類型を決定するために、全てのRGST-Nuのプロトコルを得点化するマニュアルと手続きを開発したが、更にHafsi(2005)はこれを改正した。これに基づき、最初に被験者のRGST-Nuの採点し、各個人における最も優勢な原子価を決定した。

その結果、被験者の原子価の人数は、依存の原子価が48名、闘争の原子価が27名、つがいの原子価が23名、逃避の原子価が4名と確定した。

次に被験者と同様の方法で、その友人の優勢な原子価の類型を決定した。その結果、友人の原子価の人数は、依存の原子価が51名、闘争の原子価が22名、つがいの原子価が21名、逃避の原子価が8名と確定した。

3-2. 被験者の原子価と友人の原子価に関する分析

最初に、各原子価による選択した友人の原子価の人数を比較するために、被験者の原子価と友人の原子価をクロス集計した。

被験者の各原子価による選択した友人の原子価の結果はTable 2に示されている

Table 2 原子価別の選択した友人の原子価の比較

被験者の原子価	友人の原子価			
	Dependency	Fight	Pairing	Flight
Dependency	25* (52)	11 (23)	7 (15)	5 (10)
Fight	14 (52)	8 (30)	5 (18)	0 (0)
Pairing	11 (48)	3 (13)	8 (35)	1 (4)
Flight	1 (25)	0 (0)	1 (25)	2 (50)
合計	51 (50)	22 (22)	21 (20)	8 (8)

*Note: 数字は度数を示している。括弧の内の数字はパーセンテージを示している。

通りである。

依存の原子価の被験者では友人の原子価が依存25人 (52%)、闘争11人 (23%)、つがい7人 (15%)、逃避5人 (10%) であった。闘争の原子価の被験者では友人の原子価が依存14人 (52%)、闘争8人 (30%)、つがい5人 (18%)、逃避0人 (0%) であった。つがいの原子価の被験者では友人の原子価が依存11人 (48%)、闘争3人 (13%)、つがい8人 (35%)、逃避1人 (4%) であった。逃避の原子価の被験者では友人の原子価が依存1人 (25%)、闘争0人 (0%)、つがい1人 (25%)、逃避2人 (50%) であった。

次に、各原子価による選択した友人の性別と各原子価の人数を比較するために被験者の原子価と友人の原子価及び性別をクロス集計した。

Table 3 原子価別における友人の原子価の男女選択の比較

被験者の原子価	友人の原子価							
	Dependency		Fight		Pairing		Flight	
	男	女	男	女	男	女	男	女
Dependency	13*	12	9	2	6	1	4	1
Fight	10	4	7	1	1	4	0	0
Pairing	4	7	2	1	3	1	0	1
Flight	1	0	0	0	0	1	2	0

* Note: 数字は度数を示している。

被験者の各原子価による選択した友人の性別と各原子価の人数の結果はTable 3 に示されている通りである。

依存の原子価の被験者において、友人の原子価が、依存且つ男性は13人、女性は12人、闘争且つ男性は9人、女性は2人、つがい且つ男性は6人、女性は1人、逃避且つ男性は4人、女性は1人であった。闘争の原子価の被験者において、友人の原子価が、依存且つ男性は10人、女性は4人、闘争且つ男性は7人、女性は1人、つがい且つ男性は1人、女性は4人、逃避は男女共にいなかった。つがいの原子価の被験者において、友人の原子価が、依存且つ男性は4人、女性は7人、闘争且つ男性は2人、女性は1人、つがい且つ男性は3人、女性は1人、逃避且つ男性はいなかったが女性は1人いた。逃避の原子価の被験者において、友人の原子価が、依存且つ男性は1人、女性は0人、闘争は男女共にいず、つがい且つ男性は0人、女性は1人、逃避且つ男性は4人、女性は1人であった。

最後に、被験者の性別及び各原子価と友人の性別及び各原子価の関係について調べるために被験者の性別及び原子価と友人の性別及び原子価をクロス集計した。

Table 4 原子価と男女別による友人の選択の比較

被験者の原子価	友人の原子価							
	Dependency		Fight		Pairing		Flight	
	男	女	男	女	男	女	男	女
Dependency								
男	10*	7	7	1	5	0	3	1
女	3	5	2	1	1	1	1	0
Fight								
男	6	3	5	0	1	2	0	0
女	4	1	2	1	0	2	0	0
Pairing								
男	1	3	2	1	1	4	0	1
女	3	4	0	0	2	1	0	0
Flight								
男	0	0	0	0	0	1	2	0
女	1	0	0	0	0	0	0	0

*Note: 数字は度数を示している。

被験者の性別及び各原子価と友人の性別及び原子価の人数の結果はTable 4 に示されている通りである。

依存の男性が選択した、友人が依存の男性は10人、女性は7人であった。依存の女性が選択した友人が依存の男性は3人、女性は5人であった。依存の男性が選択した、友人が闘争の男性は7人、女性は1人であった。依存の女性が選択した友人が闘争の男性は2人、女性は1人であった。依存の男性が選択した、友人がつがいの男性は5人、女性はいなかった。依存の女性が選択した友人がつがいの男性は1人、女性は1人であった。依存の男性が選択した、友人が逃避の男性は3人、女性は1人であった。依存の女性が選択した友人が逃避の男性は1人、女性はいなかった。

闘争の男性が選択した、友人が依存の男性は6人、女性は3人であった。闘争の女性が選択した友人が依存の男性は4人、女性は1人であった。闘争の男性が選択した、友人が闘争の男性は5人、女性は0人であった。闘争の女性が選択した友人が闘争の男性は2人、女性は1人であった。闘争の男性が選択した、友人がつがいの男性は1人、女性は2人であった。闘争の女性が選択した友人がつがいの男性は1人、女性は2人であった。闘争の男女共に友人が逃避の人物はいなかった。

つがいの男性が選択した、友人が依存の男性は1人、女性は3人であった。つがいの女性が選

択した友人が依存の男性は3人、女性は4人であった。つがいの男性が選択した、友人が闘争の男性は2人、女性は1人であった。つがいの女性が選択した友人が闘争の人物はいなかった。つがいの男性が選択した、友人がつがいの男性は1人、女性は4人であった。つがいの女性が選択した友人がつがいの男性は2人、女性は1人であった。つがいの男性が選択した、友人が逃避の男性は0人、女性は1人であった。つがいの女性が選択した友人が逃避の人物はいなかった。

逃避の男性が選択した、友人が依存の人物はいなかった。逃避の女性が選択した友人が依存の男性は1人、女性はいなかった。逃避の男女共に選択した、友人が闘争の人物はいなかった。逃避の男性が選択した、友人がつがいの男性は0人で、女性は1人であった。逃避の女性が選択した友人がつがいの人物はいなかった。逃避の男性が選択した、友人が逃避の男性は2人、女性はいなかった。逃避の女性が選択した友人が逃避の人物はいなかった。

4. 考察

本研究は、個人の特性である原子価の観点から、人が友人の選択を行う際の「類似性」と「異質性」に関しての実証的研究を行ったものである。Hafsi (2006) の仮説では、原子価同士のつながりについてだけを取り上げていたが、本研究では、原子価のつながりが被験者とその友人の性別とどのように関わっているかについても分析をおこなった。まず、仮説Ⅰの検証してみると、依存の被験者は同じ依存の原子価の人を一番多く友人として選択しており、友人の原子価は次に闘争、つがい、逃避の原子価の順であった。また、同じ依存の原子価の友人を選択した場合、友人の男女差はなかったが、その他の原子価の人を友人に選択した際は、男性である場合が多かった。これを更に詳しく見てみると、依存の原子価で女性は、同じ依存の女性を友人として選択しているのが多かった。これらの結果から、依存の人は同じ依存の人を友人として選択しており、更に女性の方が同じ依存の原子価の同性の友人として持っていることが実証された。また、友人の原子価が依存、闘争の原子価を合わせると全体の75%である点から仮説Ⅰは立証されたといえる。仮説Ⅱの検証してみると、闘争の原子価の被験者は依存の原子価の人を一番多く友人として選択しており、次に闘争、つがいの原子価であったが、逃避の原子価の友人はいなかった。また、友人として依存と闘争の原子価の男性が多く、これに、闘争の原子価の人の被験者に男女差はなかった。更に、友人の原子価が依存と闘争の原子価を合わせると全体の82%であった。これらの結果から、闘争の人は依存の人と闘争の人を友人として持っているが、逃避の人とは友人にならないことが立証された。次に仮説Ⅲを検証してみると、つがいの人が友人として依存の人を一番多く友人として選択し、更につがい、闘争、逃避の順であった。また、つがいの原子価の女性は闘争、逃避の原子価の友人として選択していなかった。これらの結果から、つがいの原子価の男性は全ての原子価の人と友人として持っているが、女性は闘争、逃避の原子価の人を友人として選ぶことがないといえるため、仮説Ⅲは実証されなかった。最後に仮説Ⅳを検証してみると、同じ逃避の原子価の人が友人を一番選択することが多く、次に依存、つがいの原子価を持つ人であり、闘争の原子価人はいなかった。これらの結果から、逃避の人は同じ逃避の人を友人として選択することは実証されたが、仮説Ⅳが実証されたとは言えない。

上述したように、仮説Ⅲ、Ⅳが実証されなかった原因として被験者の人数が挙げられる。また、

被験者の約半数の人が依存の原子価であり、被験者の各原子価の人数比率が一定でなかった。このような問題点を解決するためには、被験者の人数を増やし、被験者の原子価別の人数比率を一定にした上で、分析を行う必要がある。また、友人関係としての年数期間や友人として選択した理由についても調査する必要がある。これにより本研究よりも更なる実証的研究の結果が得られると考えられる。

しかし、本研究から、被験者本人の原子価と同じ原子価の人を友人として選ぶことが証明された点から、友人選択には「類似性」が重視し、「類似性」関係を作り出すことがいえる。しかし、闘争の人は依存の人を一番多く友人に選択しているという点から、友人選択には「異質性」が重視されることがいえ、「相補性」関係を作り出すという事が示唆された。

Ⅳ. おわりに

本研究は人がどのようにして多くの人々から友人を選択していくのかをBionとHafsiの「原子価」の観点から研究を行なった。先行研究から対人関係の親密化は「類似性」関係か「相補性」関係であるか、即ち、対人選択は自分との「類似性」か「異質性」が関係していることが明らかになっている。そのため、「原子価」の概念を基にし、人の4つの特性から「類似性」と「異質性」についての実証的研究を行った。その結果、どの原子価の人でも比較的「依存」の人を友人として選択している結果が出たが、これは、Brehm (1985) の相互依存性論から考えられるように、依存の人が最も相手の依存を受け入れやすいために、このような結果になったのではないかと考えられる。

更に、人は同じ原子価を持つ人間を友人として選択するケースが多い、即ち、「類似性」によって選択されるケースが多い事が明らかになった。対して、「異質性」の観点から闘争の人は依存の人を最も友人として選択するのに対し、依存の人は闘争の人ではなく、同じ依存の人を最も友人として選択している結果となった。この結果に関して、Kerckhoff&Davis (1962) が「類似性」は交際の初期段階では重要であるが、後期になると「異質性」即ち「相補性」が当事者相互の魅力の効果を持つと述べているように、友人としての交際期間が本研究の結果に影響を与えている可能性がある。以上の事を明確にするために更に研究を進めていき、本研究から友人選択における「類似性」と「異質性」即ち、対人関係における「類似性」関係と「相補性」関係について新たな示唆を提供していきたい。

〈付記〉

本論文を作成するにあたり、一方ならぬご指導を賜りました奈良大学大学院社会学研究科科长 Med Hafsi教授に心より感謝申し上げます。また、本研究に協力していただいた奈良大学の学部生、又、大学院生に感謝申し上げます。

参考文献

- Bion, W.R. (1968) *Experiences in group*. New York : Basic Books. (池田数好/訳 (1973)「集団精神療法の基礎」岩崎学術出版社)
- Brehm, S.S. (1985) *Intimate relationships*. New York : Random House.
- Freud, S. (1921) *Group psychology and the analysis of the ego*. Standard Edition, Vol.18. London: Hogarth Press.
- Grinberg, L., Sor, D., Tabak de Bianshedi, E. (1977) *Intruduction to work of Bion*, trans. A. Habu. Scotland: Cluniepress. (高橋哲郎/訳 (1982)「ビオン入門」岩崎学術出版社)
- Hafsi, M. (1997) *Valency and its measurement: validating a japane version of the reaction toGroup situa-tion test (RGST)*. *Psychologla an international journal of psychology in the orient*, vol.XL, 3, 152-162.
- Hafsi, M. & Yamagata, H., (1998) *Valency as a determinant of leadership style preference*. *Annual Reports of The Graduate School of Nara University*, 3, 103-126.
- Hafsi, M. (2003) 「ビオンの道標」ナカニシヤ出版
- Hafsi, M. (2004) 「「愚かさ」の精神分析 -Bion的観点からグループの無意識を見つめて-」ナカニシヤ出版
- Hafsi, M. (2006) *The Chemistry of Interpersonal Attraction : Further development of Bion's concept ofvalency*. 奈良大学紀要 34 (印刷中)
- Moreno, J.L. (1934) *Who shall ? suruive (Rev.ed.)* Beacon. House.stock, D&Thelen, H (1958) *Emotional dynamica and group culture*. WashingtonDC: National Training Laboratories.
- Kerckhoff, A.C&Davis, K.E. (1962) *Value consensus and need complementarity in mate selection*. *American Sociological Review*, 27, 295-303.
- 斉藤勇編 (1987) 対人魅力と対人欲求の心理 (対人社会心理学重要研究集2) 誠信書房
- 斉藤勇編 (1988) 対人知覚と社会的認知の心理 (対人社会心理学重要研究集5) 誠信書房
- 下斗米淳 (1996) 「対人関係の親密化」研究の展望：理論的枠組みの検討 専修大学学会専修人文論集58 23-49
- 下斗米淳 (1990) 対人関係の親密化に伴う自己開示と類似・異質性認知の変化 学習院大学文学部研究年報 37 269-287
- 下斗米淳 (2000) 友人関係の親密化過程における満足・不満足感及び葛藤の顕在化に関する研究-役割期待と遂行とのズレからの検討- 実験心理学研究40 (1) 1-15